



TITLE:

<学生の声> 「研究者と餅屋」

AUTHOR(S):

橋本, 大志

CITATION:

橋本, 大志. <学生の声> 「研究者と餅屋」. Cue 2014, 32: 62-62

ISSUE DATE:

2014-09

URL:

<https://doi.org/10.14989/196288>

RIGHT:

学生の声

「研究者と餅屋」

情報学研究科 通信情報システム専攻 佐藤亨研究室 博士後期課程3年 橋本大志

昭和基地は、日本から14000 km離れた東オングル島にある日本の南極観測の拠点です。私は2012年の11月末から2014年3月末までの1年4か月間、第54次南極地域観測隊の越冬隊員としてこの昭和基地に滞在していました。昭和基地では夏は60人前後、冬は30人ほどの隊員たちが、それぞれ自分の仕事のプロフェッショナルとして、基地の運営や研究観測に従事します。私の所属研究室ではこれまでに大気レーダー信号処理のための研究を行っており、私も南極に大型の大気レーダーを建設するPANSY (Program of Antarctic Syowa MST/IS radar) 計画の一員として、南極に乗り込みました。

さて、冬の昭和基地には30人しか隊員がいません。「餅は餅屋」とは言いますが、各人が自分の専門の仕事だけをしたのでは、基地の運営はまわりません。時には全員で雪に埋まった建物を掘り起し、水漏れをふさぐために走り回り、ペンギンの数を数えるために何泊も野外旅行をすることがあるでしょう。更に電気電子工学科卒で情報学研究科の学生ともなれば、掃除機の修理やパソコンの設定が毎日のように押し寄せるのです！

もちろん悪いことばかりではありません。昭和基地は人間が近代的に生きていくための設備を全て揃えており、全て隊員が自分たちで管理しなければなりません。逆に言えばそれらがどのように実現されているかについて、幅広く理解を得ることができたのです。

南極がたまたまそういう場所だったと言うこともできます。ですが、自分の専門分野以外の様々なことに興味を持ち習熟しておくことは、今回のように突然要求されることもあれば、後々自分の研究に役立つこともあるはずです。研究者は餅屋に似ています。餅屋が餅をつけるのは当然のことです。また、餅は訓練すれば誰でもそれなりにつくことができます。幅広い知識をもって、餅屋としての専門性を前面に出しつつ、他の餅屋とも差をつける、そういった勉強の方向性を改めて認識させられる一年となりました。

「海外で研究をすること」

工学研究科 電気工学専攻 引原研究室 博士後期課程3年 八尾 惇

2014年4、5月にスウェーデン王立工科大学にて海外研究インターンシップを行いました。海外研究インターンシップ中に、本原稿の執筆依頼を拝受致しました。ちょうど良いタイミングだと考え、この度の海外研究インターン中に感じたこと及び勉強になったことを、研究面及び生活面の観点から書いていきたいと思います。

まず、研究を行う観点に立脚し、海外研究インターンで勉強できた点を以下に列挙します。(1) これまでの研究を別の観点から見直せること、(2) 新たな研究課題を策定する苦労が経験できること、(3) 異なる研究環境で研究推進の工夫をする能力を獲得できること、(4) 英語でディスカッションを行う力が少しはつくことなど、多々勉強になることがありました。

次に生活面では、日本の良い点と悪い点を知ることができました。日本で生活している際には気づかなかったのですが、日本の良い点は「お・も・て・な・し」の心が行き届いている点だと感じました。日本では、本当に細やかな気配りが随所に存在していたことに改めて気付きました。むしろスウェーデンでは、気を遣うことよりも、自己主張をし、はっきりと自分の意見を伝えることが重要であると感じました。一方、日本の悪い点は、気を遣いすぎるあまりなのか、「無駄なことに労力を割きすぎているのでは？」と感じる場面が多々存在しました。すなわち、スウェーデン人や研究室の人々は手を抜く所と頑張る所のメリハリがはっきりとしていました。

以上のように、スウェーデンで研究及び生活を行うことは非常に有意義な時間でした。ただし、最後に自戒の意味を込めて書くのですが、海外に目を向けることと同時に、「基礎学力」を充実させることも重要であると感じました。